

佐藤忠良《賢島の娘》



佐藤忠良は、1912(明治45)年宮城県に生まれた。現在の日本を代表する彫刻家の一人で、1981(昭和56)年には、パリのロダン美術館でも個展を開催して、話題となった。

佐藤忠良は、東京美術学校を1939(昭和14)年に卒業し、新制作派協会彫刻部創立に本郷新、船越保武らと参加して、彫刻家としての道を歩み始めた。

彼の作品は初期から現在に至るまで、人物—しかも若い女性—に主題をとった像が多いが、それらは若い女性の体が持つ澁刺とした魅力を的確なモデリングによっていかに表現しており、さわやかな印象を私たちに与えてくれる。志摩地方

の若い娘をモデルにした「賢島の娘」もそうした一連の女性像の一つで、小像ながら健康的な感覚のあふれる佳品である。

長野県松本地方で発達した本棟造りの堂々とした民家。大きな切妻の屋根の頂点には「雀おどし(雀おどり)」が乗っかっている。題名の通り、長野にもようやく春が訪れたらしく、画面は鮮やかな色彩であるにもかかわらず、うっすらと白くたなびく「もや」が見事に表現されている。敗戦直後の1945年(昭和20)年、娘の疎開先であった新潟県越後川口の民家を描いて以来、向井潤吉は亡くなるまで2000点以上、日本各地の古い民家を描き続けたと言われている。彼は戦時中、爆撃によって伝来の民家もろくも消滅していく様子に心を痛み、日本人としての自分の心の拠り所であった民家を絵に残していくことをそのとき決心したのであった。



向井潤吉《遅春(長野県塩尻市広丘郷原)》